

令和4年度

学生によるオレンジリボン運動

愛知県立大学 実施報告書



実施主体 愛知県立大学 村田ゼミ

実施内容 「周囲の人の気づかいとまなざしの大切さ」を伝える

①事前に取り組んだ内容

- ①過去の子ども虐待事例の分析を通して、子ども虐待への対応を中心とした子ども家庭福祉の現状について理解を深めた。
- ② オレンジリボン運動の起源となった小山事件について、事件の背景や原因を当時の新聞やインターネットの記事などから検討した。
- ③虐待に関する文献を分担して読み、学んだ内容をゼミ内で共有することで子ども虐待への理解を深めた。
- ④ミニオープンキャンパス・出張授業に向けて、高校生にも理解しやすい題材やわかりやすい専門用語への置き換えを検討した。
- ⑤ 子ども虐待に関する認識度調査実施にあたり、前年度までの調査の内容や先行研究を調べ、調査に用いる質問内容を検討した。

②実施期間に取り組んだ具体的内容

- ①オリジナルポスターの作成と学内外への掲示
- ②オリジナルグッズ（しおり）の作成・配布
- ③SNS による活動内容の紹介
- ④大学内図書館での子ども虐待防止啓発コーナーの設置
- ⑤WEB による「子ども虐待認識度調査」の実施
- ⑥在校生向け学習会の実施
- ⑦高校生向け学習会（ミニオープンキャンパス・出張授業）の実施
- ⑧「未来の子どもたちへのメッセージ」の募集・展示
- ⑨オレンジリボン運動の紹介の学内展示コーナーの設置
- ⑩大学祭でのブースの設置（来場した子どもたちを対象としたしおり作り、来場者を対象とした子ども虐待認識度調査、オレンジリボン運動及び子ども虐待防止の啓発ポスターの掲示等の実施）

③オレンジリボン運動を終えて・・・

〈子ども虐待認識度調査〉
「189」の意味を知っている地域住民の割合が、在学生の割合に比べて低いことがわかった。また、身体的虐待に比べて、心理的虐待への認識が低いことがわかった。この結果から、活動範囲を学外に広げることと虐待行為に対する理解を深めるための活動が必要で



あると考えた。

〈学内学習会〉

小山事件のポイントとなると思われる場面を取り上げ、事例検討を行った。地域住民の気づきの大切さを伝えることができた一方で、「(虐待でなかったら…) 通告をためらう気持ち」があることがわかった。このことから市民に求められている役割(虐待かどうかの判断ではなく、公的機関につなげることを)を周知していく必要があると考えた。

〈高校生向け学習会〉

子どもへの虐待について考えるきっかけにもらうため、日常的に起こり得る様々な場面を、状況を変えて提示し、虐待かどうかについて検討してもらった。学内での学習会同様、虐待の判断の難しさが指摘された。であるからこそ、「小さな気づきをアクションに変えていくことが大切である」ということを伝えることができた。

〈大学祭〉

子から親へ、親から子へ書いてもらったメッセージを通して、親子のお互いを思い合う気持ちを知ることができた。またブース内にこれまでの活動と、虐待とオレンジリボン運動を知るための資料を掲示することで、大学祭の来場者に向けて虐待防止の啓発を行うことができた。

〈啓発に向けて意識したポイント〉

- ① 先輩たちの取り組みを引き継ぎ、先輩たちの活動に繋げていくために、「続けること、続けられること」を念頭に活動を行った。
- ② 子育ては保護者だけが担うものではなく、親子の周りにいる人たちの気づかひやまなざしが虐待予防にもつながるということを意識して活動を行った。



【学校名】 <https://www.aichi-pu.ac.jp/>